

正史を彷徨う

十九章 文武天皇までの陵と宮

森隆一



法隆寺境内空撮（Wikipedia「法隆寺」）

19. 継体天皇までの陵と宮

序

始めに、Part VII からは 1 Part 1 章が続き、Part の意味がなくなってきたことと、図表が不得手ファイルの容量が増したことにより、今後は Part を止めることにした。

ここまで何回かに分けて、日本書紀の神武天皇紀から継体天皇紀までを見てきた。(9 章で崇神天皇紀から神功皇后紀、11 章で神武天皇記、16 章で応神天皇記から継体天皇記)

ここで、理解できたのは短い文が殆どで、書かれている内容を把握したい場合は、Wikipedia の関連する記事から、“紀によれば” 続く記事から引用した。初めの数回は、記紀の記事を確認していたが、ほぼ合っていたため、腑に落ちない場合を除き、確認は止めることにした。

訳が充分でなくても実行できる方法として、17 章の後半で試みた、文字列を指定して検索する方法に着目する。17 章では、竹内宿禰・筑紫・伊予(・周防)・安芸・吉備・淡路・大臣・大連などに対して検索した。

現状で検索の対象と考えているのは固有名詞である。具体的には、陵と宮、地名、官職、豪族の祖先、朝鮮の国名・地名などを想定している。

とりあえずは、これらのリストを作り、眺めながら、手掛かりを探っていくことにする。

日本書紀の記事に関しては、半ば無意識に、次のような区別を念頭においていたと思う。

(イ) 天皇に関するもの：即位・崩御・父母・皇妃・皇子・皇女

(ロ) 宮・陵・行幸・狩

(ハ) 皇位をめぐる記事

(ニ) 何らかの勢力との抗争（神のお告げ）

(ホ) 百済・新羅・呉を主とする他国の記事

(ヘ) 内政のうち官職の設置と吏員の任命

(ト) その他内政

(チ) 地方の記事

これらについて振り返ってみよう。

(イ)については、即位・崩御・父母と皇后・皇太子の任命の記事は全て抜き出したつもりである。他の皇妃と皇子・皇女は殆ど取り挙げられなかったが、后妃の父は調べてみる必要を感じている。

皇后に関しては「日本神話・神社まとめ」に書かれている「〇〇天皇の皇后と妃とその子供たち」において、興味ある考えが述べられている。

(ロ)については、例も少なく、全て取り挙げた。遷都に関しては、その経緯は書かれていなかった。狩りは単なる狩猟ではなく、軍事演習や威力偵察の意味があったと考えている。

(ハ)・(ニ)について、例えば、仁徳天皇記から雄略天皇紀の前文までに、幾つかの変死が書かれている。南北朝の時代と同様に、この時代にも皇位(王位)をめぐる抗争があった。変死は抗争を示しているのではないか。例えば、仁徳天皇と菟道稚郎子の譲位し合う話は、皇位を争ったのではないか。

このような記事で、何がおきたかはわかるが、細かい経緯は文章を理解できていない。興味ある記事については、Wikipedia の関連する事項で、“日本書紀では”で始まる文で補った。

(ホ)も(ハ)・(ニ)と同様である。百済に関しては、王の即位・薨御の記事があり、王名も書かれている。一方、新羅については、王名は書かれてなく、即位・薨御の記事もない。また、戦闘の記事や新羅不朝貢 という記事がかけられている。

百済王朝と倭王朝はかなり近いと思っている。百済は 660 年に滅亡した。日本書紀の新羅は金王朝ではないか。金王朝が昔王朝・朴王朝を攻略した時期は法興王の前 2 代辺りか。

(ヘ)については、大臣・大連がほぼ常置となるのが継体天皇のころである。また、朝鮮への遠征軍は磐井の鎮圧軍に大將軍が任命されている。

（ト）災害、建築、土木

（チ）後の時代に総領が設置されていた地域として、坂東・吉備・筑紫・伊予・周防が挙げられている。このうち、吉備・筑紫は何度か現れ、重要な事件が起きている。一方、伊予・周防(四国・安芸)に関する記事は印象に残っていない。

全ての天皇紀には、宮(都)と陵が書かれている。ただし、陵は、崩御に続いてかあかれているものと、次の天皇の行事として書かれているものがある。古事記では、殆どが、陵在〇〇也と書かれて、日本書紀では、葬△△天皇于〇〇陵・葬于□□〇〇陵のように書かれているものが多い。

宮は遷宮(遷都)が行われたときに描くのが基本のようである。確認していないが、遷宮の記事のない天皇紀も可能性があるが、あったとしても少ないであろう。

地名考察の手始めとして、陵と宮から取り掛かることにするが、次の疑問を設定しておく。

疑問 19.1. 大和にいないと考えられる天皇の陵や宮が何故大和にあるされているのか。

Wikipedia「天皇陵」では

大化以前の陵墓管理についてはよくわかっていないが、日本書紀推古天皇紀の、620 年(推古天皇 28 年)に欽明天皇陵に砂礫を葺き盛り土をしたという記事が、天皇陵の修築が行われた例としてあげられる。

宇都宮藩の建議で幕府が 1862 年(文久 2 年)から行った事業が文久の修陵である。各陵の工事前と工事後の様子を絵師に描かせ、上下二巻にまとめて 1867 年(慶応 3 年)に朝廷と幕府に献上したものがいわゆる文久山陵図である。文久の修陵で多少でも手が加わったのは 109 か所におよぶ。天皇陵だけでも、山城 34、大和 34、河内 24、和泉 3、摂津 1、丹波 2 で全部で 76 か所となっている。

と書かれている。

文久の修陵でどのような修復がおこなわれたのかは、興味あるが、本稿ではそこまでの情報は利用できそうもない。

陵は天皇と一部の皇子皇女の墳墓(墓)である。その真偽については議論があるが、日本書紀で天皇陵とされていることは何らかの状況を反映していると考えられる。

ここで、伝安閑陵古墳という用語が書かれている。これは、あるときに、恐らく帰化人を渡来人と言い換えたころに、考古学者の誰かが提唱

したと記憶している。これを見たときは、天皇陵と特定できていないから自然と思った。考古学的に特定できるとは、墓誌が発見されるか遺物に天皇名が書かれていることであろうが、墓誌の方は日本では見つかっておらず、期待できない。陵は宮内庁が管理しており、発掘は不可能であり、古墳かどうかも確認できない。また、伝安閑陵古墳ではなく、伝菅原伏見陵のほうが正統性が高いと思われる。

Wikipedia「大仙陵古墳」

大仙陵古墳または大山古墳は、大阪府堺市堺区大仙町にある古墳、天皇陵。形状は前方後円墳。百舌鳥古墳群を構成する古墳の 1 つで、日本最大の古墳にして、世界最大級の墳墓である。実際の被葬者は明らかでないが、宮内庁により百舌鳥耳原中陵として仁徳天皇（皇居・宮殿は大阪市にある難波高津宮）の陵墓に治定されている。仁徳天皇陵や仁徳陵古墳とも言う。

Wikipedia「仁徳天皇」陵・霊廟

陵の名は百舌鳥耳原中陵。宮内庁により大阪府堺市堺区大仙町にある遺跡名「大仙陵古墳（大山古墳）」に治定されている（北緯 34 度 33 分 50 秒 東経 135 度 29 分 14.5 秒）。宮内庁上の形式は前方後円。墳丘長 525 メートル、後円部 286,33 メートル、前方部幅 347 メートルもあるという調査結果が 2018 年 4 月 12 日に発表された。墳丘長、体積共に日本

一の前方後円墳であり、世界的に見ても最大級の墳墓である。

古事記には御陵は毛受の耳原にあり」、日本書紀には寿陵であったと記され、(八十七年冬十月の癸未の朔己丑に、百舌鳥野陵に葬りまつる、とある。延喜式諸陵寮には「百舌鳥耳原中陵。在和泉国大鳥郡。兆域東西八町。南北八町。陵戸五烟。」と記されている。陵名の由来は、陵墓造営中に野から鹿が走り込んできて絶命。その鹿の耳の中からモズが現れたことから地名を百舌鳥耳原と名づけられる。また、この古墳の北と南にも大古墳があり(北陵は反正天皇陵、南陵は履中天皇陵)、「中陵」と名づけられている。

Wikipedia「誉田御廟山古墳」

誉田御廟山古墳または誉田山古墳は、大阪府羽曳野市誉田にある古墳。形状は前方後円墳。古市古墳群を構成する古墳の 1 つ。実際の被葬者は明らかでないが、宮内庁により恵我藻伏岡陵として第 15 代応神天皇の陵に治定されている。また外濠と外堤は 1978 年(昭和 53 年)に国の史跡に指定されている。名称は応神天皇陵とも呼ばれることがあり、大仙陵古墳(大阪府堺市)に次ぐ全国第 2 位の規模である巨大古墳。

被 Wikipedia「誉田御廟山古墳」葬者と造営年代

円筒埴輪の型式や一部採集されている須恵器の型式、最近の考古学的な暦年代研究、年輪年代測定法による調査結果からも、5 世紀の第 1 四

半期と推定される。被葬者は、倭の五王のうちの讃を誰にあてるかで変わってくる。この古墳は、古くから応神天皇の陵墓であるとの伝承を持つが、応神天皇の治世を、古事記の崩年干支が甲午(394 年)であることから井上光貞は 370 年頃から 390 年頃と想定したが、この説を採用すると年代が合わない。直木孝次郎は日本書紀・応神紀と三国史記から百濟阿莘王・腆支王との同時代性から 4 世紀末から 5 世紀初頭としており、これならば年代的には整合するし、資料解釈の方法自体にも説得力がある。総じて誉田御廟山古墳が応神天皇陵である蓋然性は高いといわなければならないが、そのように想定した場合、大仙陵古墳の被葬者が仁徳天皇であるとする比定の蓋然性は高くなるものの、古市古墳群の仲ツ山古墳、百舌鳥古墳群の上石津ミサンザイ古墳、古市の誉田御廟山古墳、百舌鳥の大仙陵という大阪平野南部における古墳編年と、仁徳・履中・反正と 3 代続いた大王が全て百舌鳥に陵墓を造営したという記紀伝承との間に矛盾が生じるし、従来の古墳の治定にも不整合が生じるという別の問題が発生し、また、井上光貞、上田正昭、直木孝次郎らがかつて唱えた河内政権論は成り立ちがたくなる。

ここでは、まず、陵と宮を一覧し、思いつくことを書き留めていく。

奈良湖(と河内湖)について、簡単に見ておこう。

19.1. 文武天皇紀までの陵と宮

とりあえず、聖武天皇までの陵と宮を、表 19.1 にまとめてみた。

天皇陵については「[宮内庁・天皇陵](#)」から得た。天皇陵でないものは Wikipedia で調べた。これらのうち、推古天皇までは、日本書紀の記事で照合し、異なるものは()で囲んだ。宮については、日本書紀の記事から抜き出したものを、Wikipedia の各天皇の記事の皇居と照合した。宮の所在地は Google で検索し、ヒットしたものから感覚で選び、引用した。結果として「[陵墓探訪記](#)」から得たものが殆どとなった。

陵の種類については「うまし うるわし 奈良」>「[歴代天皇と陵所](#)」から引用した。ここには、一覧表の他に、歴代天皇陵の分布・佐紀盾列古墳群の2図も含まれている。

また、古事記で陵の所在地も記入した。古事記では、殆どが、陵在○ ○也と書かれている。日本書紀では、葬○○陵、葬△△天皇于○○陵のように書かれている。

表の構成は次のようである。

天皇名	陵名 (日本書紀)	所在地	近さ	別名・形状	
	陵名 (古事記)			宮	所在地

近さ以外は説明の必要はないと思う。近さは

＊： 最終の宮と同じ市町村 ○： 最終の宮に近い、

△：近い宮がある、

×：離れている

に分けた。同じ市内の遠い所、隣の市の近い所のほうが距離が短いことはあり得るので、*と○の区別は意味が薄いかもしれないが、生活圏ということからは意味があるのではないか。

下線は上記判別に対する注意があることを示す。

他に、気になることを挙げる

古事記では、五瀬命に陵即在紀國之竈山也とお書かれている。また、神功皇后紀はなく、仲哀天皇紀の崩御の記事の後に、大後の記事として書かれていて、陵の記載はない。また、宣下天皇・欽明天皇についても陵の記載がない。(陵で検索の結果)仲哀天皇変更

顕宗天皇の近飛鳥八釣宮が明日香村となっている。これは、近の意味が一般となっているものと逆である。

表 19.1 継体天皇までの陵と宮

A 神武天皇から垂仁天皇

神武天皇	畝傍山東北陵 畝火山之北方白檮尾上	橿原市	*	山本ミサンザイ古墳(円墳33m) 橿原宮	橿原市
綏靖天皇	倭桃花鳥田丘上陵 衝田岡	橿原市	○	塚山古墳(円墳16m) 葛城高丘宮	御所市
安寧天皇	畝傍山南御陰井上陵 畝火山之美富登	橿原市	○	自然丘陵 片鹽浮孔宮	大和高田市
懿徳天皇	畝傍山南織沙谿上陵 畝火山之眞名子谷上	橿原市	*	自然丘陵 輕曲峽宮	橿原市
孝昭天皇	掖上博多山上陵 掖上博多山上	御所市	*	自然丘陵 掖上池心宮	御所市
孝安天皇	玉手丘上陵 玉手岡上	御所市	*	新築の円丘17m 室秋津嶋宮	御所市
孝靈天皇	片丘馬坂陵 片岡馬坂上	王寺町	○	新築の方丘15m 黒田廬戸宮	田原本町
孝元天皇	劔池嶋上陵 劔池之中岡上	橿原市	*	自然丘陵 輕境原宮	橿原市
開化天皇	春日率川坂本陵 伊邪河之坂上	奈良市	*	念仏寺山古墳(前方後円墳105m) 春日率川宮	奈良市
崇神天皇	山邊道上陵 山邊道勾之岡上	天理市	○	行燈山古墳(前方後円墳242m) 磯城瑞籬宮	桜井市
垂仁天皇	菅原伏見陵 菅原之御立野中	奈良市	△	宝来山古墳(前方後円墳227m) 纏向珠城宮 來目高宮 茅渟菟砥川上宮	桜井市 橿原市(?) 阪南市(?)

B 景行天皇から允恭天皇

景行天皇	倭國之山邊道上陵 山邊之道上	天理市	△	渋谷向山古墳(前方後円墳300m) 泳宮 可児市(?) 纏向日代宮 桜井市 長峽縣 行宮 行橋市 日向高屋宮 西都市 筑紫高田行宮 大牟田市 纏向(日代)宮 桜井市 高穴穗宮 大津市
(日本武尊)	白鳥陵	御所市 羽曳野市		
成務天皇	倭國狹城盾列陵 沙紀之多他那美	奈良市	×	佐紀石塚山古墳(前方後円墳218m) 志賀高穴穗宮 大津市
仲哀天皇	河内國長野陵(恵我長野陵) 河内恵賀之長江	藤井寺市	×	岡ミサンザイ古墳(前方後円墳242m) 角鹿筥飯宮 敦賀市 紀伊徳勒津宮 和歌山市 穴門豊浦宮 下関市 檀日宮 福岡市
(神功皇后)	狹城盾列陵 ?	奈良市	×	(小山田邑斎宮) 古賀市 檀日宮 福岡市 松峽宮 筑前町 穴門豊浦宮 下関市 小竹宮 御坊市 磐余若櫻宮 桜井市
応神天皇	(恵我藻伏岡陵) 川内恵賀之裳伏岡	羽曳野市	△	誉田御廟山古墳(前方後円墳425m) 難波大隅宮 大阪市 葉田葦守宮 岡山市
仁徳天皇	百舌鳥野陵 毛受之耳〈上〉原	堺市	△	大仙古墳(前方後円墳486m) 難波高津宮 大阪市 筒城宮 京田辺市
履中天皇	百舌鳥耳原陵 毛受	堺市	×	上石津ミサンザイ古墳((前方後円墳360m) 磐余稚櫻宮 桜井市
反正天皇	耳原陵 毛受野	堺市	○	田出井山古墳(前方後円墳148m) 丹比柴籬宮 松原市
允恭天皇	河内長野原陵 河内之恵賀長枝	藤井寺市	○	市野山古墳(前方後円墳230m) 藤原宮 橿原市 茅渟宮 泉佐野市

C 安康天皇から敏達天皇

安康天皇	菅原伏見陵 菅原之伏見岡	奈良市	○	方丘(城跡 か?)65m 石上穴穗宮 天理市
雄略天皇	丹比高鷲原陵 河内之多治比高鸛	羽曳野市	×	島泉丸山古墳(円墳76m)平塚古墳(方墳50m) 泊瀬朝倉宮 桜井市
清寧天皇	河内坂門原陵 ?	羽曳野市	×	白髪山古墳(前方後円墳115m) 磐余甕栗宮 橿原市
(飯豊皇女)	葛城埴口丘陵	葛城市	*	忍海角刺宮 葛城市
顕宗天皇	傍丘磐杯丘陵 片岡之石坏岡上	香芝市	○	自然丘陵 近飛鳥八釣宮 明日香村
仁賢天皇	埴生坂本陵 ?	藤井寺市	×	野中ボケ山古墳(前方後円墳122m) 石上廣高宮 天理市
武烈天皇	傍丘磐杯丘陵 片岡之石坏岡	香芝市	×	自然丘陵 泊瀬列城宮 桜井市
継体天皇	藍野陵 三嶋之藍(御陵)	茨木市	△	大田茶臼山古墳(前方後円墳226m) 樟葉宮 枚方市 山背筒城宮 京田辺市 弟国宮 長岡京市 磐余玉穗宮 桜井市
安閑天皇	河内舊市高屋丘陵 河内之古市高屋村	羽曳野市	○	高屋築山古墳(前方後円墳122m) 勾金橋宮 橿原市
宣化天皇	大倭國身狹桃花鳥坂上陵 ?	橿原市	○	鳥屋ミサンザイ古墳(前方後円墳138m) 桧隈廬入野宮 明日香村
欽明天皇	桧隈坂合陵 ?	明日香村	○	平田梅山古墳(前方後円墳140m) 磯城嶋金刺宮 桜井市 (難波祝津宮) 大阪市 (樟勾宮) 枚方市 (泊瀬柴籬宮) 桜井市
敏達天皇	(河内磯長中尾陵) 川内科長	太子町	×	太子西山古墳(前方後円墳113m) 百濟大井 桜井市 譯語田幸玉宮 桜井市

D 用明天皇から聖武天皇

用明天皇	磐余池上陵 河内磯長原陵 石寸掖上 後遷科長中陵	太子町	×	春日向山古墳(方墳65×60m) 磐余池邊雙槻宮 桜井市
崇峻天皇	倉梯岡陵 倉椅岡上	桜井市	*	新築の円丘18m 倉梯柴垣宮 桜井市
推古天皇	竹田皇子之陵(磯長山田陵) 大野岡上 後遷科長大陵	太子町	×	山田高塚古墳(方墳63×56m) 豊浦宮 明日香村 (耳梨行宮) 橿原市 小墾田宮 明日香村
(聖徳太子)	磯長陵	太子町	○	(斑鳩宮) 斑鳩町
舒明天皇	押坂陵(忍坂内陵)	桜井市	○	飛鳥岡本宮 明日香村
皇極天皇	齊明天皇			飛鳥板蓋宮 明日香村
孝徳天皇	大坂磯長陵	太子町	○	難波宮 大阪市
齊明天皇	智崗陵	高取町	△	飛鳥板蓋宮 明日香村 飛鳥川原宮 明日香村 飛鳥後岡本宮 明日香村 飛鳥田中宮 橿原市 朝倉橘広庭宮 朝倉市
天智天皇	山科陵	京都市	○	近江大津宮 大津市
弘文天皇	長等山陵	大津市	*	近江大津宮 大津市
天武天皇	檜前大内陵	明日香村	*	飛鳥浄御原宮 明日香村
持統天皇	檜前大内陵	明日香村	*	飛鳥浄御原宮 明日香村 藤原宮 橿原市
文武天皇	桧隈安古山陵	明日香村	○	藤原京 橿原市
元明天皇	奈保山東陵	奈良市	*	藤原京 橿原市 平城京 奈良市
元正天皇	奈保山西陵	奈良市	*	平城京 奈良市
聖武天皇	佐保山南陵	奈良市	*	難波宮 大阪市 平城宮 奈良市

次の図は、「[歴代天皇と陵所](#)」に掲載されている天皇陵の分布図から、文武天皇までを写し取ったものである。



図 19.1 文武天皇までの陵の分布

この図で、**緑字**は神武天皇と欠史八代、**青字**は崇神天皇から神功皇后以前、**黒字**は応神天皇から継体天皇、**赤紫字**は安閑天皇以降である。さらに、**オレンジ字**で天皇以外の陵を幾つか追加した。また、天皇名に続く数字は、「宮内庁・天皇陵」による代数、a、b は 16 章で設定したものである。† は和風諡号に豊が含まれている天皇である。

年代順は、**緑**→**青**→**黒**→**赤紫** である。本稿の立場からは、**緑字**の天皇は存在が問題であり、**青字**の天皇は九州に居て近畿には居なかった。**黒字**の天皇の時代に東遷が為された。したがって幾人かの天皇は近畿には居なかったことになる。天皇陵の配置から何かが得られるのではないかと考えている。

ここで、次の作業仮説を設定し、これらを念頭において、表 19.01・図 19.01 を見ていくことにする。

作業仮説 19.1. 天皇陵は、生まれ育った地、または、崩御した宮の近くに造られた。

本稿の立場からは、応神天皇以前の天皇に関しては、大和は上記作業仮説には合わない。このことを考えることが本章の目標である。

まずは、図 19.1 に書かれている文武天皇眼までの天皇陵を眺めて気のついたことを挙げる。

(イ) 緑字 の天皇

神武天皇から開化天皇の 9 人のうち、5 人が橿原市、2 人が御所市、王寺町と奈良市が 1 人ずつで、全て奈良県にある。

全ての天皇について、宮と陵の所在地が近いとしてよいと思われる。揃いすぎている感がある。ただし、孝霊天皇の王寺町と田原本町であるが、現在の地勢からは近いとしてよいと思われるが、図 V05 の奈良湖の存在からは疑問が残る。陵に関しては、丘陵地とすれば可能と思われる。宮の所在地である田原本町は、図 V05 では、唐古・鍵遺跡の辺りで、この辺りは青色(水色)となっている。

「縄文時代の江戸」での解説は、青は弥生～古墳時代に湖であったと思われる部分です。水面標高は 45m あたりか。濃い青は飛鳥時代あたりでも湖であったと思われる部分です。

ということである。

これからは、日本書紀の記事での年代では田原本町は奈良湖にあり、人は住むことが出来なかったといえる。一方、記紀の編纂時である 8 世紀前半では、太子道もできていて、近いと言える状況と考えられる。

これは、神武天皇と欠史八代は後で造られたことの傍証となり得る。

(ロ) 青字の天皇

崇神天皇から仲哀天皇までの 5 人のうち仲哀天皇を除く 4 人は奈良県にある。成務天皇陵の北隣に神功皇后陵があり、仲哀天皇陵のある古市古墳群には日本武尊の白鳥陵がある。

これらの天皇の記事は、九州から中四国への浸出を関東に置き替えたものと考えた。

これらの天皇と神功皇后は、加上説を念頭において、9 章で考察した。ここでは、400 年以前の倭王(=天皇)は九州に居たと考えた。

垂仁天皇の宮は

桜井市→橿原市(?)→阪南市(?)

と遷っている。陵は奈良市で、近いと言えるのは桜井市である。陵との関連では逆順のほうが自然である。

景行天皇の陵は天理市で、宮は

可児市(?)→桜井市→行橋市→西都市→大牟田市→桜井市→大津市
となっている。近いのは桜井市のみである。

成務天皇の宮は大津市で、陵は奈良市である。これは近いとはいえない。また、奈良市に陵があるのも疑問が残る。

仲哀天皇の陵は藤井寺市で、古市古墳群に属する。(ここには、日本武尊の白鳥陵もある。) 宮は

敦賀市→和歌山市→下関市→福岡市

と遷った。どの宮も陵とは遠く離れている。18.5 節で引用した日本辞典の記事「都怒国造(周防)」では、都怒国造は都怒国(現 山口県周南市都濃周辺)を支配したとされ、と書かれている。また、山口県内最古である周南市の竹島御家老屋敷古墳や、下松市にあった宮ノ州古墳などは紀角宿禰の一族のものと考えられている、とも書かれている。

景行天皇紀と仲哀天皇紀の宮を移っていく記事には、日付が干支で記されている。これを解読してみれば何か得られるのかもしれない。期待しているのは、近畿から九州までの移動が可能かどうかの判断である。

神功皇后の陵は奈良市にあり、宮は

古賀市→福岡市→下関市→御坊市→桜井市

と遷った。これは摂政となった、すなわち、仲哀天皇死後のことであるから、皇后時代に仲哀天皇と同じ宮に居たとして、繋げてみると、

敦賀市→和歌山市→下関市→古賀市→福岡市→下関市→御坊市→桜井市
となる。陵のある奈良市とは、桜井氏以外は、遠く離れている。ここでは、桜井市も近いとはしていない。

図 19.01 で見られるように、青字の 5 人の天皇のうち、仲哀天皇を除き、陵は奈良県(奈良市と桜井市)にある。陵の位置からは、神功皇后は、仲哀天皇の皇后よりも成務天皇の皇后のほうが自然と思われる。

とにかく、色々な疑問点が多い。印象としては、陵の空白地で差し障りのない奈良市周辺にまとめて配置した感じがする。継体天皇以降吉備出身の豪族移り住んだことが考えられる。

仲哀天皇に関しては、日本武尊との関連で大阪側にしたと考えている。

(ハ) 黒字で書かれた天皇

黒字で書かれた応神天皇から継体天皇までの 12 人の天皇のうち、河内に陵のないのは、奈良の安康・武烈・顕宗と茨木市の継体の 4 天皇である。

これらの天皇は 16 章で扱った。

応神天皇の宮は、大阪市→岡山市 と遷り、陵は羽曳野市にある。

崩御地については、本文では **天皇崩于明宮** となっているが、一書では **崩于大隅宮** となっている。これは陵に近いといえる。明宮は単に宮とすれば、葉田葦守宮となり、陵とは離れている。

清寧天皇の陵のある羽曳野市と宮のあった橿原市は、距離的には近いが、河内飛鳥と飛鳥である。距離的には近いが、政治的には近いかどうか。

武烈天皇の陵のある香芝市と桜井市(香芝市)とは近いとはいえない。

継体天皇の宮は、

枚方市→京田辺市→長岡京市→桜井市

と遷っている。陵のある茨木市と桜井市も近いとは言い難いが、桜井市以外の宮とは近い。

(二) 赤紫字で書かれた天皇

赤紫字で書かれた安閑天皇から文武天皇までの 16 天皇の 14 陵のうち、5 陵が河内飛鳥周辺、7 陵が明日香周辺、2 陵が京滋にある。

これらの天皇は今後見ていく予定である。

安閑天皇の陵のある羽曳野市と宮のあった橿原市は近いが、河内飛鳥と飛鳥である。

欽明天皇の宮は

桜井市→大阪市→枚方市→桜井市

と遷った。陵のある明日香村と桜井市は、遠くはないが近いかは微妙である。

推古天皇の宮は 明日香村→橿原市→明日香村 と遷った。陵は竹田皇子之陵で後に太子町の磯長山田陵に改葬された。竹田皇子之陵は橿原市の大野岡上陵とされていて、後者は近いが、前者は近いとは言い難い。

舒明天皇の陵は桜井市で宮は明日香村にあった。押坂は近いと言える。

図 19.1 で。赤紫で書かれた天皇の陵は、磯長谷古墳群と明日香に集まり、安閑天皇陵だけが古市古墳群の南部にある。前者が浸出して後者に

なったのか、別なのか。

宮内庁の一覧。陵形により分けてみる。天皇名の右の数字は代数である。

前方後円	孝元 8	開化 9	崇神 10	垂仁 11	景行 12	成務 13	仲哀 14
	応神 15	仁徳 16	履中 17	反正 18	允恭 19	清寧 22	顯宗 23
	仁賢 24	継体 26	安閑 27	宣下 28	欽明 29	敏達 30	
円丘	神武 1	綏靖 2	孝安 6	雄略 21	崇峻 32	皇極 35	(齊明 37)
	孝徳 36	弘文 39	天武 40	持統 41			
方丘	安康 20	用明 31	推古 33				
山形	安寧 3	懿徳 4	孝昭 5	孝霊 7	武烈 25	文武 42	
上円下方	舒明 34	天智 38					

表 19.2 陵形とその天皇名

19.2. 奈良の古道と奈良湖の水位

図 V03 河内湖から、東大阪市、東成区、城東区鶴見区など上町台地と生駒山の間の平たい部分の殆どは河内湖になっている。これに、古大和川を考慮すれば、古市古墳宮辺りまで航行が可能であったと思われる。

図 V05 奈良湖と図 IX24 大和の古道を比較すれば、下ツ道は図 V05 の水色と緑色の境界辺りを走り、藤原京と平城京とを結んでいるかのようである。

Wikipedia「藤原京」では、天武天皇 5 年(676 年)に天武天皇が新城の選定に着手し、その後も京師に巡行したという記述がある、と書かれている。また、Wikipedia「大和の古道」では、上ツ道・中ツ道・下ツ道については、日本書紀・孝徳天皇の白雉 4 年 653 年 六月条に、处处の大道を脩治る、とあることなどを勘案して 7 世紀半ば頃に敷設されたと推定されている、と書かれている。

上記記事では、脩治の時期と敷設の時期は殆ど差がないとしている。低湿地の新道では十分考えられることと考えられる。とにかく、3 道の成立には平城京は関係ないといえる。言い換えれば、平城京周辺はその建設まではめばしいものではなく、下ツ道の築造後に、その周辺も含めて

開発されたと考える。

図 V05 で、藤原京は緑の部分の山寄りに築かれている。水害を考えればここらあたりまでか。

また、奈良湖の後退に伴い、大和の生産力が上がり、河内を越えたのではないか。(河内は、江戸時代の大和川の架け替え以後に発展した。) これにより、河内王朝(あるいは、他の倭の王朝)の生駒山地の東麓への進出が促されたと考える。

何処かのサイトで、万葉集の次の歌を奈良湖に関して引用していた。

万葉集巻一第二 (舒明天皇の国見の歌)

[原文]山常庭 村山有等 取與呂布 天乃香具山 騰立 國見乎為者 國原波
煙立龍 海原波 加萬目立多都 怜A國曾 蜻嶋 八間跡能國者

[訓読]大和には 群山あれど とりよろふ 天の香具山 登り立ち 国見をすれば 国原は 煙立ち立つ 海原は 鴨立ち立つ うまし国ぞ 蜻蛉島 大和の国は Japanese Text Online 「[萬葉集](#)」

大和には多くの山があるけれど とりわけ立派な天の香具山 その頂に登って大和の国を見渡せば 土地からはご飯を炊く煙がたくさん立っているよ 池には水鳥たちがたくさん飛び交っているよ ほんとうに美しい国だ この蜻蛉島大和の国は 「[万葉集入門](#)」

人の住む国原と天の香久山からカモメの飛び立つのが見られる海原はどの範囲であったのか。

また、かなり前に、NHK ハイビジョンスペシャル：謎の都－飛鳥京発掘－よみがえる“水の都”で、大きな池があったとされていた。

34 代舒明天皇の宮は飛鳥岡本宮で 35 代皇極天皇の時と 37 代斉明天皇の最初の宮は明日香板蓋宮である。天の香久山の南には大官大寺跡があり、北西には藤原宮跡がある。飛鳥川流域の開墾がこの時代に天の香久山の南麓にまで達したのではないかと想う。

ここで、18 章で考察した上中下の 3 道に関して補足しておこう。18 章では、下つ道は藤原京の造営頃までに作られたと考えた。平安京は、人があまり住んでいない遊水地的な所に造られたようであるが、平城京や藤原京も同じ状況であったと考えるのが自然であろう。

奈良湖に関して、古墳時代の湖水面は標高 50 メートルと書かれているサイトを見たが、url を記録しなかった。

奈良湖(河内湖・筑紫湖)の検討には標高の入った地図が意味をもつと考える。国と地理院の地形図では、二万五千分の一の地図の等高線の間隔は 4m で平坦地は 2m となっている。

国土地理院> [「地理院地図を見る」](#) をズーム・インし、左下に 100m と

表示される図では、整数値がぽつんと書かれているところがある。これは標高と思われる。唐子辺りの 24 号線では 47 となっている。三角点や水準点には小数点以下 1 桁で表示されている。

この後、画面中央の + の交点の標高が小数点 1 桁で左下に表示されることがわかった。

琵琶湖の湖水面

琵琶湖について見ていこう。まず、湖水面は 85 とする。

彦根条近くの湖岸の道路の標高は 87.2 である。

彦根城の外堀の外周道路は 86-88、本町は 88-89、京町は 89-90、彦根駅前ロータリは 90 となっている。8 号線は彦根駅の東で 95.0 で、東海道線とほぼ平行に走っている。

近江八幡では、近くの湖岸道路は 86.9、日牟禮八幡の境内が 88.0、堀の外の道路が 88.5、郵便局交差点が 90.1、近江八幡駅 91 となっている。8 号線は郊外で 97 前後で、東海道線とほぼ平行に走っている。

両市ともほぼ同じで、中山道は、8 号線と同じとすれば、95 あたりで、湖水面より、プラス 10m、江戸時代に形成されたと思われる旧市街は 90 前後で、プラス 5m となる。八幡山や築城時の彦根城は、呼称したいに浮かぶ島であったと思われる。

これから、琵琶湖において安全な標高は、江戸時代でプラス 5m、古

代ではプラス 10m と考える。

ここで、琵琶湖から導いたプラス 10m が妥当かどうかが問題となる。
琵琶湖・瀬田川と奈良湖・大和川の比較から、感覚的には、半分のプラス 5m が考えられると思っている。

法隆寺境内の標高

聖徳太子創建とされている法隆寺境内の標高を調べた。

JR 法隆寺駅前 40.1、並木道南端 47.1、南大門前 52.3、中門前 57.1、
五重塔 59.6、講堂 60.5、夢殿 52.6 となっている。

法隆寺の造営は 600 年頃であり、この時点で安全な地点が選ばれたはずである。講堂の 60m は絶対に安全で、中門前 57.1 もほぼ安全ということになる。古代の他の寺の規模から見れば、創建時の寺域はこの辺りで、南大門は後に造られたのではないかと想う。

中門前の標高 57.1 から 5 を引けば、52.1 となり、これが湖水面の上限となり、南大門の標高になる。この付近に船着き場があったと考えられないか。

法隆寺のホーム・ページで、南大門の説明では、法隆寺創建時には中門前の石段上に立っていたが、寺域の拡大により現在の場所に移されたと言われます。創建時のものは永享 7 年(1435)に焼失し、永享 10 年(1438)年に現在の門が再建されました。

南大門の移設の時期は書かれていないが、創建時には中門辺りが安全で、移設時には現在の南大門辺りになったのではないか。

以上から、法隆寺創建時の湖水面の標高は 50m と考える。これは、他で見た例と同じ結論となる。

作業仮説 19.2. 法隆寺創建時の湖水面の標高は 50m で、安全な標高は 55m である。

下つ道

ここで、18.6 節で取りあげた奈良の古道を見ていく。

大和高田まではほぼ下つ道と思われる国道 24 号線の標高は

三条通高架橋南	59.4	ダイワハウス工業西	52.8
郡山 IC 北	48.7	25 号線分離点	47.4
溝幡	47.5	唐子遺跡水準点	47.8
田原本町	51.9	笠縫駅対岸	53.6
脇の水準点	52.7	新ノ日駅東	57.8
大和八木駅東	60.9		

である。

作業仮説 19.2 の法隆寺の創建時で安全な基準 55m を越えるのは、初

めの1地点と終わりの2地点のみとなる。

唐子(・鍵)遺跡を見ていく。まず、唐子遺跡沿いの水準点は47.8となっている。史跡公園内の遊歩道は47.4-48.9である。東に在る法貴寺集落の郵便局は51.6である。

また、下つ道が藤原京造営時と同じころにつくられたとすれば、藤原京造営時には湖水面は45mであったと考えられる

中つ道・上つ道とさらに古いとされている山の辺の道を考えてみる。
唐子遺跡のすぐ北側を走り、長柄駅に至る道に沿って、南北の道を西から東をみってみる。(地理院地図で黄色の道)

中つ道

まず、中つ道としては長柄運動公園と備前町間の黄色の道であろう。

大安寺	60.7	北之庄町	57.4
西名阪南	57.4	前栽駅東	55.6
長柄運動公園	50.6	伊与戸	57.6
常磐町	62.2	耳成駅西	65.7
下八釣町	74.9		

上つ道

上つ道は、3 道は等間隔であったことから、桜井線に近い黄色の道を繋いだものではないかと考える。奈良市街地は 169 号線に近く、169 号線かもしれない。

元興寺	85.9	京終駅東	84.3
帯解駅東	68.3	櫛本駅東	69.4
長柄駅西	59.9	纏向古墳群西	64.9

この先は追跡できなかったが、大福駅西を通る道ではないか。

山の辺の道

山の辺の道はハイキングコースとして紹介されている。

東大寺南大門	101.8	頭塔東	108.7
崇道天皇陵西	79.9	白川ダム東	144.4
天理東 IC 南	130.6	布留町	82.6
石上神宮西	90.7	西山古墳東	80.9

成願寺町 169 交叉 84.0

この先は国道 169 号線と考える。また、この東に東海自然歩道が並行している。

東海自然歩道 15. 山の辺の道 http://www.tokai-walk.jp/course_guide/course15.html

国道 169 号線をみてみる。なお、京終駅から JR 桜井線と並走している。

崇道天皇陵西	79.9	白川ダム東	144.4
登大路交叉	95.9	帯解駅東	85.9
天理 IC 南	75.3	25 号線との合流地	64.8
崇神天皇陵入り口	88.8	巻向駅近く郵便	78.9
近鉄交叉	72.4	安部文珠院近く	82.4 (県道)
山田寺跡	113.3	(天檜丘北)雷	99.1

となっている。

これらから、桜井線建設に伴い中つ道と下つ道が崩れ、169 号線となったと考える。

平均値を用いて議論するには、田原本・長柄を結ぶ県道から一定間隔で標高を求めるなどの方法をとることが必要と思われる。替わりに、上で得た標高の各道路ごとの最低値を挙げる。

下つ道	溝幡	47.5
中つ道	長柄運動公園	50.6
上つ道	長柄駅西	59.9
山の辺の道	西山古墳東	80.9

ここまでの標高は、道路上にカーソルをあわせた。隣接した低地の値を用いる方がよいのかもしれない。今後、用いるときに検討したい。

3 道

上中下の 3 道は何時つくられたか、あるいは、どのように機能したのかを考えてみよう。藤原京造営時には平城京はなかったから、両京間の運輸ではない。考えられるのは、飛鳥や藤原京の造営のための物資運送路ではないか。

大和川で河内から飛鳥への水運が可能であったかが問題となるが、難しかったと思われる。「地理院地図を見る」から標高をみると、三郷町 36.3、柏原市片山町 21.3 である。参考に保津峡をみると、亀岡市馬堀 110、嵐山 93 で、直線距離も似ている。保津峡よりは緩やかで川幅も広いと思われるが、かなりの荷物を積んでの遡上は難しかったのでは想っている。

奈良市からは奈良坂を越えれば、木津川左岸になることが注目される。
コトバンク「奈良坂」百科事典マイペディアの解説

奈良と南山城の境をなす平城山を越える坂道。時代によって変遷する。奈良盆地を南北に縦貫する下ツ道に続く歌姫越えが古く利用されたが、平城宮造営で切断され、東の中ツ道に通ずる車谷道が利用されるように

なる。平安中期に東大寺や興福寺の門前郷が発達するとさらに東の般若寺道が盛んに利用され、以後現在までこのルートが奈良・京都を結ぶ主要道となる。

歌姫越えは 67、車谷道は 86、般若寺道は 87。

大久保バイパスの一部が開通しただけで高速道路はなかったころの昭和の時代、観光シーズンに京都から奈良にドライブするとき、木津駅辺りから 24 号線バイパスに入り口までが常に渋滞していた。これから逃れる方法は、途中から般若寺道に曲がるしかない。木津を通らない方法として、

木津川左岸を、京都府道 22 号線を南下し、途中ごちゃごちゃした道を走り、運がよければ、奈良県道 751 号線を通って、秋篠寺辺りに至るルートである。この 751 号線の部分が歌姫越えであった。秋篠側・佐保川と下る川筋は高瀬川の水運より上であったかもしれない。

藤原宮

Wikipedia「藤原京」では、日本書紀の天武天皇 5 年 676 に天武天皇が新城の選定に着手、持統天皇 4 年 690 を境に再開、694 年に飛鳥浄御原宮(倭京)から宮を遷した、と書かれている。

藤原宮跡は 72.2、藤原京朱雀大路跡(南端?)は 78.2 である。ともに地図上で△の位置で見た。橿原公苑の東で 73 前後、神宮の門前で 74.7 である。

明日香にある遺跡の△の地点での標高は、飛鳥寺跡 106.2、川原寺跡 117.0、伝飛鳥板蓋宮跡 117.0、飛鳥京苑池 108.2 となっている。また、藤原京近くでは、本薬師寺跡 75.7、大官大寺跡 89.4 となっている。

これらから、耳成山・畝傍山・天香久山の三角形の中、飛鳥川が流れ、低湿地(氾濫原、遊水地)の可能性が考えられ、天武天皇の時代には都城の建築が可能となったと考える。

他の古道も見ておく。

横大路

横大路に近いと思われる 165 号線-166 号線は

忍坂 97.3、桜井駅南 79.1、香久山駅南 73.0、膳夫町西 68.9、畝傍駅 63.3、今井町南 62.5、高田市駅北 63.6、磐城駅南 78.6、竹内北 112.5、府県境(竹内峠)289.4、太子町南 91.4 となっている。

『近畿の地質的景観』 第4回<奈良湖>

<https://ameblo.jp/narapapi/entry-12660008157.html>

生駒の神話 大和湖（奈良湖）

<http://ikomashinwa.cocolog-nifty.com/ikomanoshinwa/2015/07/post-36cd.html>

県道 9 号大和郡山斑鳩線

法隆寺東から大和高田に至る県道を見ていく。

法隆寺東 25 号線交叉 47.2、法隆寺駅西 39.9、御幸大橋北詰 44.5(水辺 36.9)、河合町大塚山古墳西 44.0、近鉄俵本線高架南 44.1、高田川橋北 53.5、大和高田駅東 57.0 である。

25 号線

25 号線を大阪府東端から天理駅南までを見ていく。

河内堅上駅対岸 30.9、三郷駅対岸 36.9、王寺駅対岸 42.3、龍田神社南 49.9、法隆寺南 47.1、中宮寺跡東 48.5、大和小泉駅南 51.5、筒井駅南 48.7、25 号線合流点 51.9、24 号線分離点 47.4、天理駅南 61.6

19.3. 国見山

天皇陵を地図で確認しているときに、国見山が幾つかあることに気がついた。Wikipedia「国見山」には、次の国見山の一覧が挙げられている。

- ・ 北海道河東郡音更町と河西郡芽室町の町境にある山。標高 128m。
- ・ 岩手県北上市にある山。標高 244m。
- ・ 福島県南相馬市にある山。標高 564m。
- ・ 三重県松阪市と奈良県吉野郡東吉野村の県境にある山。1,248m。
- ・ 三重県名張市・津市と奈良県宇陀郡曽爾村の県境にある山。863m。

（高見山は、奈良県吉野郡東吉野村と三重県松阪市（旧飯南郡飯高町）との境界にある山である。標高は 1,248.4m。）

- ・ 奈良県奈良市と同県天理市の市境にある山。680m。
- ・ 奈良県御所市にある山。229m。
- ・ 奈良県宇陀市と同県宇陀郡曽爾村の市町境にある山。1016m。
- ・ 大阪府枚方市にある山。284m。
- ・ 兵庫県宍粟市にある山。465m。山周辺は県立国見の森公園。
- ・ 徳島県三好市にある山。1,409m。
- ・ 高知県高知市にある山。926m。雪光山とも呼ぶ。
- ・ 高知県香美市と同県長岡郡本山町の市町境にある山。1,089m。

- ・ 熊本県山鹿市菊鹿町（筑肥山地）にある山。1,018m。
- ・ 熊本県山鹿市鹿央町にある山。389m。
- ・ 熊本県水俣市大川にある山。867m。
- ・ 熊本県球磨郡球磨村一勝地にある山。969m。
- ・ 長崎県佐世保市にある山。777m。
- ・ 宮崎県西米良村と熊本県八代市にまたがる山。1391.5m。
- ・ 宮崎県都城市高城町にある山。
- ・ 鹿児島県肝属郡肝付町（大隅半島）にある山。887m。

これらは、2つの地域を分ける山脈に位置している。

日本書紀検体天皇紀までを「國見」で検査し、ヒットしたのは

天皇陟彼菟田高倉山之巔 瞻望域中 時國見丘上則有八十梟帥

のみであった。高倉山の峰から域中を眺めたとき、國見丘に八十梟帥がいたということである。この國見丘は、上記リストの上から2番目、三重県名張市・津市と奈良県宇陀郡曽爾村の県境にある山とされている。この辺りの経過は、熊野から吉野を経て宇陀に到達し、宇陀から飛鳥を攻略する過程である。

自国を見るならば、わざわざ辺境の山に登るよりも、畝傍山や天香久

山のように、中央に位置する単独峰のほうが効率的である。

これから、次の作業仮説を置く。

作業仮説 19.3. 国見山で見るのはこれから攻略する国である。

他の項目(例えば、宮・行程)などの図に書き込むと面白いと思うが、かなりの手間がかかりそうである。替わりに、Google Map で『国見山』で検索をした結果から、九州・中国四国・近畿のスクリーン・ショットが図 19.02 である。ここには、Wikipedia のリストより多い個所がマークされている。

これらの図で(掲載図では確認できないかもしれないが)赤丸に山の記号が書かれたものが国見山である。縮尺や位置を変えると、表示されるマークが増減する。また国見岳も表示される。

九州の国見山

まず、九州から見ていく。

左側上部にあるのが、長崎面佐世保市世知原町開作で、右側上部にあるのは、大分県国東市国見町岐部である。

中央上部からやや左下がりに 4 つ並んでいるのは、順に、福岡県築上

郡築上町極楽寺・大分県日田市花月・熊本県山鹿市菊鹿町矢谷・熊本県山鹿市鹿央町霜野である中間。辺りに日田市がある。

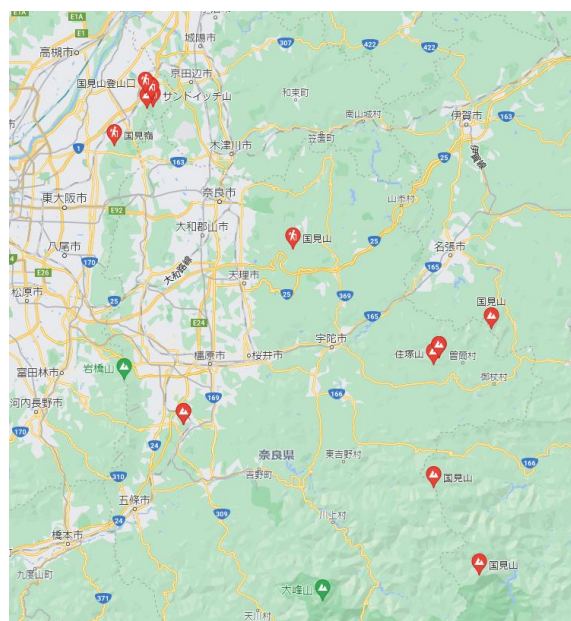
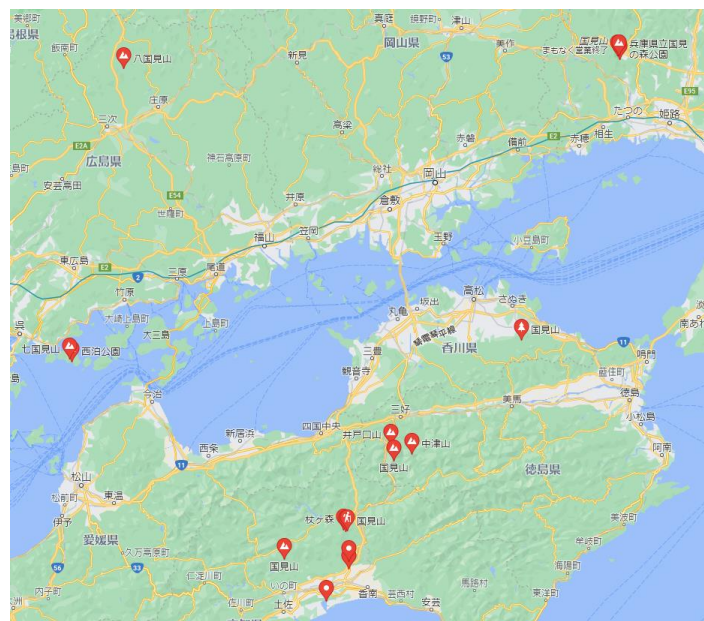
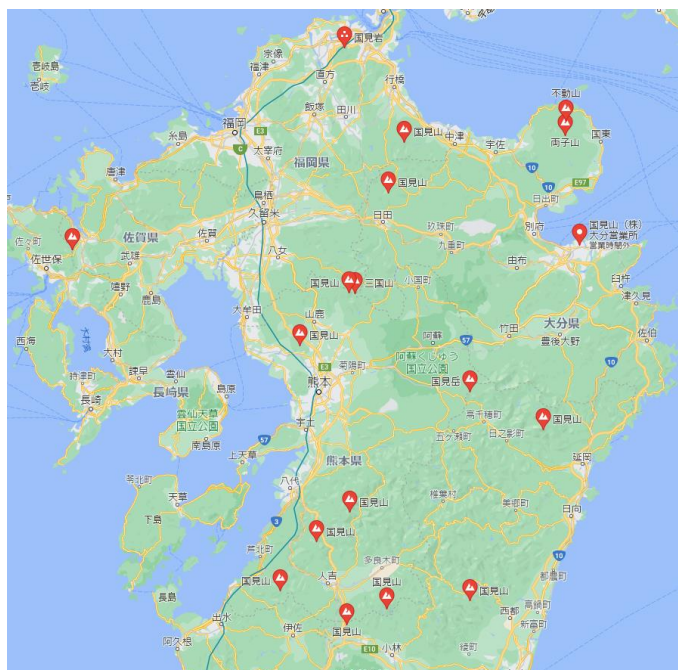


図 19.2 近畿以西の国見山

次は、宮崎県西臼杵郡高千穂町河内の国見岳と宮崎県延岡市北方町二股の国見玉である。これは大分県と宮崎県の境界にある。この西側に、熊本県球磨郡五木村乙・熊本県八代市坂本町市ノ俣・熊本県葦北郡芦北

町國見である。

最後は、熊本県・宮崎県と鹿児島県の県境地帯に 3 つ描かれているもので、宮崎県えびの市東川北・熊本県球磨郡あさぎり町皆越・鹿児島県伊佐市大口青木。

伊都国(福岡市西部)からみれば、これらは 3 つのラインを為しているとも見られる。

本稿の立場からは、最初のラインは三国志に書かれている女王国の境界と考えられる。現在、福岡市から日田市付近に往くには、南下して筑後川を遡る経路が普通と思われるが、行程表では遠賀川を遡っている。これからは、長崎県の半島部分と有明海沿岸は女王国に属していないと考えられる。

このラインと 2 つ目のラインの間を征服した過程に日本武尊の話を入れたものが景行天皇紀ではないかと考えている。

2 つ目のラインと 3 つ目のラインの間は宮崎県に属する。ここは日向三代、神武天皇の前三代、の舞台である。

中国・四国の国見山

続いて、中国・四国を見ていく。

瀬戸内海沿岸にあるのは、広島県呉市蒲刈町宮盛と香川県さぬき市寒

川町石田西。縮尺を上げると、愛媛県松山市下伊台町にも国見山が見られる。

中国自動車道近くでは、広島県庄原市口和町宮内と兵庫県宍粟市山崎町段がある。

四国中央部では、徳島県三好市西祖谷山村西岡、高知県香美市土佐山田町上穴内、高知県南国市外山、高知県高知市鏡敷ノ山である。

広島県呉市のものは神武東征で安芸から吉備へは徒歩で移動した記事を連想させる。

兵庫県宍粟市のものは岡山県と兵庫県の県境に位置する。中国自動車道から山陽道を経て、枚方の対岸高槻に繋がる。

四国の国見山に関する危機の記事は思い浮かばない。これからは、南海道ルートをとったものが主流となったとも考えられる。

近畿の国見山

近畿地方では、左上にあるのは大阪府枚方市津田に位置する。次は、奈良県奈良市長谷町と奈良県御所市柏原である。残りの 4 つは、三重県津市美杉町太郎生・奈良県宇陀郡曽爾村小長尾・奈良県吉野郡東吉野村麥谷・三重県多気郡大台町久豆に位置する。中間に高見山がある。

三重県と奈良県の境界の国見山は、大和を制圧した後、伊勢湾を見坐

したときのものとする。

ここで、枚方市と御所市の国見山は何処を見据えていたのだろうかという疑問が生じる。淀川と紀ノ川より大和を目指したときのもので、東遷の最終段階のものとする。

19.4. 継体天皇紀までの天皇陵考察

図 19.1 の天皇陵を地域で分け、表 19.1 のデータを一部加えたものが次の表である。なお、記号は宮と陵の位置関係で、*：最終の宮と同じ市町村、○：最終の宮に近い、△：近い宮がある、×：離れている、であった。

表 19.3 天皇陵の地域分け

奈良市	開化	9 (前方後円)	*	垂仁	11 (前方後円)	△	成務	13 (前方後円)	×
	安康	20 (前方後円)	○					神功皇后	
天理市	崇神	10 (前方後円)	○	景行	12 (前方後円)	△			
ここまでは大和川右岸(北)に位置する。									
桜井市	崇峻	32 (円丘)	*	舒明	34 (上円下方)	○			
王寺・香芝	孝霊	7 (山形)	○	顯宗	23 (前方後円)	○	武烈	25 (山形)	×
御所市	孝昭	5 (山形)	*	孝安	6 (円丘)	*			
橿原周辺	神武	1 (円丘)	*	綏靖	2 (円丘)	○	安寧	3 (山形)	○
	威徳	4 (山形)	*	孝元	8 (前方後円)	*	宣下	28 (前方後円)	○
明日香	欽明	29 (前方後円)	○	斉明	35, 37 (円丘)	△	天武	40 (円丘)	*
	持統	41 (円丘)	*	文武	42 (山形)	○			
百舌鳥	仁徳	16 (前方後円)	△	履中	17 (前方後円)	×	反正	18 (前方後円)	○
古市	仲哀	14 (前方後円)	×	応神	15 (前方後円)	△	允恭	19 (前方後円)	○
	雄略	21 (円丘)	×	清寧	22 (前方後円)	×	仁賢	24 (前方後円)	×
	安閑	27 (前方後円)	○					日本武尊	
磯長谷	敏達	30 (前方後円)	×	用明	31 (方丘)	×	推古	33 (方丘)	×
	孝徳	36 (円丘)						聖徳太子	
茨木市	継体	26 (前方後円)	△						
山科・大津	天智	38 (上円下方)	○	弘文	39 (円丘)	*			

殆どの古墳は綿密に○○古墳群と分類されているが、調べるのも大変なことと、本稿ではそこまでの分類は必要ないこと、位置が掴みやすい

ことから上のようにした。大阪側は、幾つかの市町にまたがっているのと、百舌鳥・古市・磯長谷はかなり知られていると思われるのでそのまま用いた。

表 19.3 より、前方後円墳について考えてみる。

Wikipedia「前方後円墳」から

前方後円墳は、古墳の形式の 1 つ。円形の主丘に方形の突出部が接続する形式で、双丘の鍵穴形をなす。主に日本列島で 3 世紀中頃から 7 世紀初頭頃(畿内大王墓は 6 世紀中頃まで)にかけて築造され、日本列島の代表的な古墳形式として知られる。

3 世紀中ごろ、大和地方の纏向(現・奈良県桜井市)に巨大都市が出現し、最古の前方後円墳とされる箸墓古墳を築造する。これをもって古墳時代の始まりとする。その後日本各地に同じ形の墳墓が築造されていった。大和政権の勢力下にある日本の諸地域(およびそれに影響を受けた朝鮮半島南部)でのみ見られる前方後円墳の起源については、これまでに様々な仮説が唱えられている。

最もよく知られているものは、弥生時代の墳墓から独自に発展したものであるという学説である。この説においては従来より存在した円形墳丘墓の周濠を掘り残した陸橋部分(通路部分)で祭祀などが行われ、その後この部分が墓(死の世界)と人間界を繋ぐ陸橋として大型化し円墳と一

体化したと考えられる。

それに対して、各地方政権の墳墓の糾合によるという説もある。例えば形は播磨の前方後円型墳墓から、葺石は古代出雲政権の四隅突出型墳丘墓から、というように、弥生時代に作られていた各地方政権の墳墓の諸要素を糾合して、大和政権が前方後円墳を考案したという。

上記引用と本稿での考察から幾つかの問題点が生じる。

本稿では、作業仮説 I14. “倭の五王の時代に倭の東遷が行われた。”を提唱した。倭の五王の上奏文は、413 年から 502 年までである。北九州から近畿までの移動を考えれば、この半分の期間は近畿には倭王朝は居なかったことになる。450 年辺りの天皇は、允恭天皇 412-453、安康天皇 454-456、雄略天皇 457-479 年である。このうち、雄略天皇陵は円丘墳で他は前方後円墳である。550 年頃の実天皇は欽明天皇 539-571 であり、欽明天皇陵は前方後円墳である。

倭の五王に関しては検討中であるが、上奏文からは、451 年から 451 年までの倭王は、讃・珍・済の 3 人である。また、3 世紀中ごろに大和地方に前方後円墳があったとすれば、これは倭王朝とは関係が無いことになる。ここで、倭王朝は、倭の五王続く倭王による王朝の意味で用いている。

表 19.3 で、黒字の天皇の陵の殆どは百舌鳥古墳群と古市古墳群にあり、

他の地域にあるのは安康天皇陵・顕宗天皇陵・武烈天皇陵で、雄略天皇と武烈天皇を除き、陵形はは前方後円墳である、

赤紫の天皇の陵は、桜井市・明日香とこれに近い宣下天皇陵・磯長谷とこれに近い安閑天皇陵で、前方後円墳は宣下天皇陵・欽明天皇陵・安閑天皇陵・敏達天皇陵である。

この地域分けの順に各古墳群の地図を見て思いつくことを挙げていくことにする。以下の図は、地理院地図で天皇陵の名が現れる最小の縮尺で切り取ったものを、本稿に合うように縮小した。

この過程で、各天皇ごとに陵と宮、および、特定できる地名を書き込んだ地図が出来ればと面白いとおもったが、定説をあつめることと、これを作図する2つが必要で、当分は手を付けることは難しい。

奈良市の天皇陵 開化 9(前方後円) 垂仁 11(前方後円) 成務 13(前方後円)

安康 20(方丘)

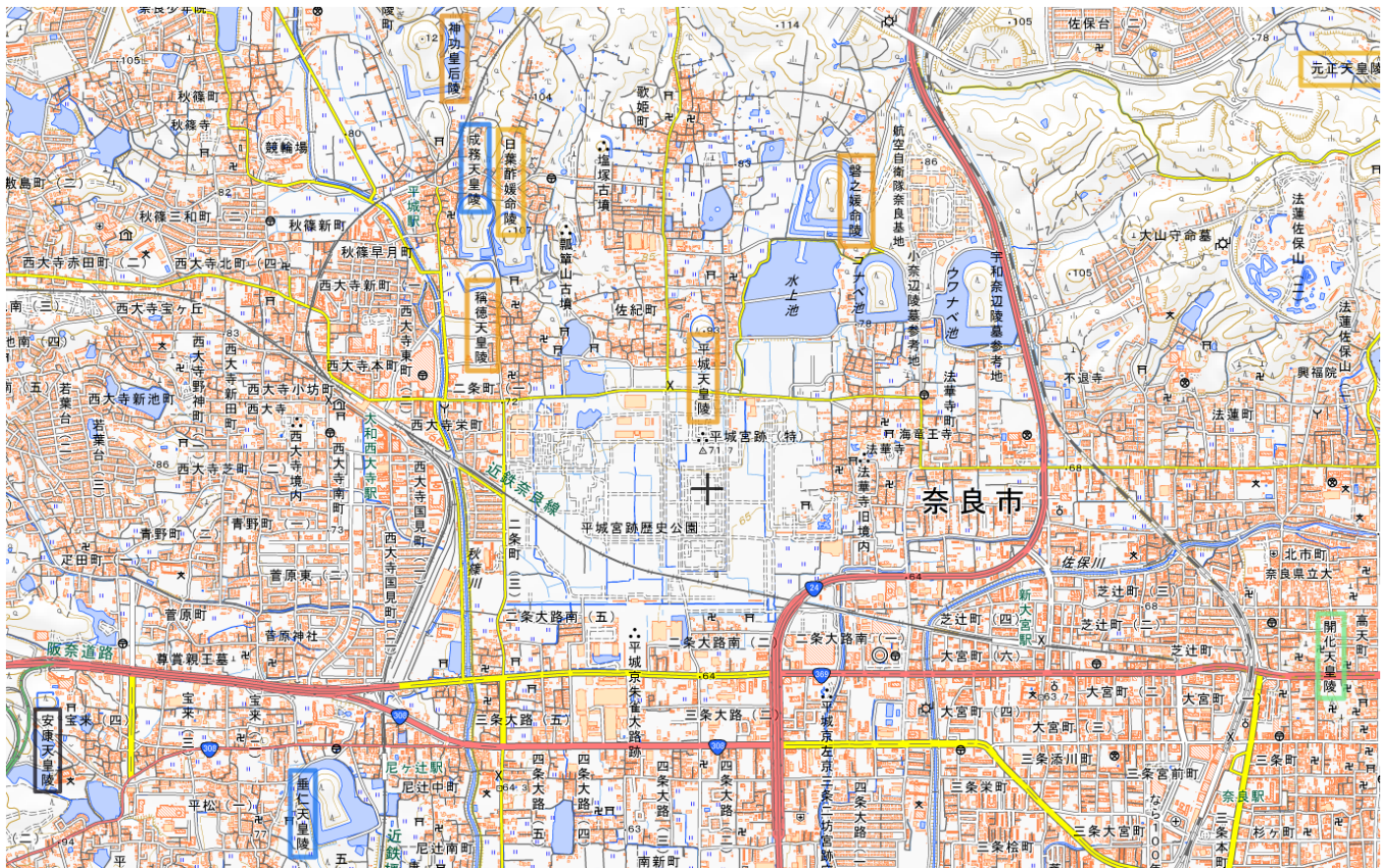


図 19.3 奈良市の天皇陵

この図には、皇族や安閑天皇以降の天皇の陵も描かれている。天皇陵としては、称徳天皇陵・平城天皇陵・元正天皇陵。皇族では、神功皇后陵・日葉酢媛陵・磐之媛命陵。他には、大山守墓・尊賞親王墓などが見られる。

Wikipedia「日葉酢媛命」から

日葉酢媛命は、垂仁天皇の 2 番目の皇后。父は丹波道主王、母は丹波之河上之麻須郎女。垂仁天皇との間に景行天皇のほか 2 皇子・2 皇女を産む。日本書紀によれば、垂仁天皇の皇后狭穗姫命が同天皇 5 年に薨じた後、その遺志により、同 15 年 2 月 10 日に丹波(後の丹後国を含む広義の丹波国)から妹たちとともに後宮に迎えられた。同年 8 月 1 日に皇后に立てられた。垂仁天皇 32 年 7 月 6 日に薨じた。その葬儀に際して、それまで行われていた殉死を悪習と嘆じていた天皇が群卿に葬儀の方法を問うと、野見宿禰が生きた人間の代わりに埴輪を埋納するように進言したため、その陵墓に初めて人や馬に見立てた埴輪が埋納され、以後も踏襲されるようになったという。

古事記では天皇崩御後も生きており、多遲摩毛理(田道間守)から時じくの香の木の実の半分を受け取ったとされる。

Wikipedia「磐之媛命」から

磐之媛命は、古墳時代の皇妃。日本書紀では磐之媛、古事記では石之日売、その他、磐姫とも記す。仁徳天皇の 4 人の皇后のうちのひとり。仁徳天皇 2 年に立后。葛城襲津彦の娘で、武内宿禰の孫にあたり、皇族外の身分から皇后となった初例とされる。孝元天皇の男系来孫(古事記では玄孫)。仁徳天皇の男御子 5 人のうちの 4 人(履中天皇・住吉仲皇子・反正天皇・允恭天皇)の母。記紀によるととても嫉妬深く、仁徳天皇 30

年に、彼女が熊野に遊びに出た隙に夫の仁徳天皇が八田皇女(仁徳の異母妹。磐之媛命崩御後、仁徳天皇の皇后)を宮中に入れたことに激怒し、山城の筒城宮(現在の京都府京田辺市多々羅付近)に移り、同地で没した。

Wikipedia「大山守皇子」から

応神天皇の皇子で、母は高城入姫命(品陀真若王の女)。仁徳天皇・菟道稚郎子の異母兄に当たる。大山守命とも。応神天皇 40 年 1 月、菟道稚郎子の立太子の際、山川林野の管掌を任されたが、兄である自らが皇太子になれなかったことを恨んでいた。応神天皇の崩御後、密かに皇位を奪おうと謀り、皇太子を殺害するために数百の兵を挙げた。しかし、この謀は前もって大鷦鷯尊(後の仁徳天皇)と皇太子の察知するところとなり、菟道川の渡河中に渡し守に扮する皇太子の計略によって船を転覆させられ、救援を請うも空しく水死した。

物語的には影のうすい、垂仁天皇と成務天皇と仁徳天皇・菟道稚郎子に反逆した大山守皇子が現れるのは興味深い。陵の位置により、天皇と後続をグループ化することが可能か。とにかく、試みることは面白いと考えている。

奈良の平野部は古墳時代には湖沼地であった。従って、緑字と青字の天皇の宮は陵の近くにはなかったということになる。下つ道に関する考

察から、大和川の北の低地部が開発されたのは藤原京設営時以降と考える。それ以前は、湖沼はもっと広がっていたと思われる。従って、緑字と青字の天皇の宮は陵の近くにはなかったということになる。緑字と青字の天皇陵は(孝昭・孝安を除き)これらの地の(高台に)配置されている。これらの陵墓は平城京成立後に祖先を祀るものとして設定されたと考える。(築造・借用)祀った人々は倭王朝の東遷に随ってきた豪族が考えられる。記紀でこれらの天皇の子孫とされている豪族がその候補と考えている。

天理市の天皇陵 崇神 10(前方後円) 景行 12(前方後円)

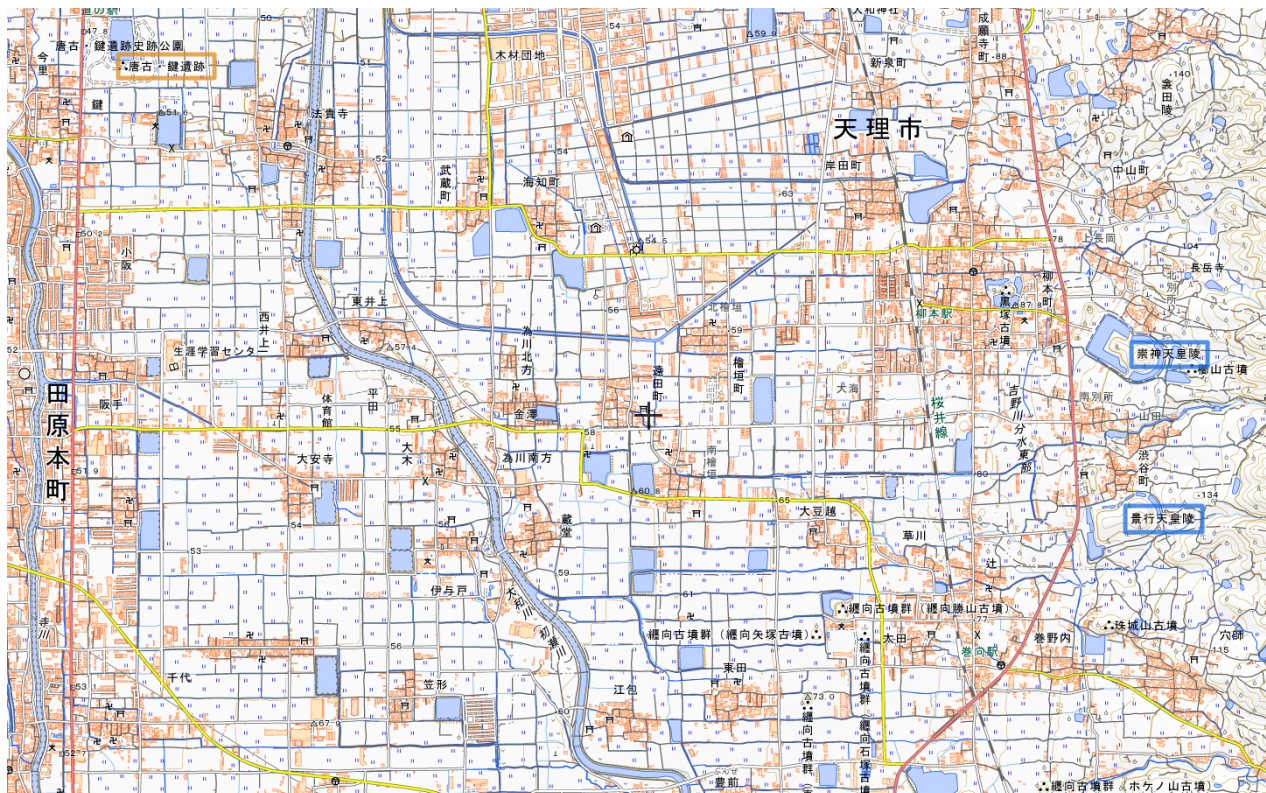


図 19.4 天理市の天皇陵

本稿では、青文字の崇神天皇と景行天皇は居なかったと考えている。

2つの陵は山の辺の道に沿っている。位置は天理市ではあるが、その南端で桜井市に近い。桜井線の巻向駅が近い。ここには、纏向古墳群がある。景行天皇陵の南には大神神社その東には三輪山がある。崇神天皇陵の少し北に離れたところに石上神宮があり、その東には(大)国見山がある。また、西には唐子遺跡がある。奈良と飛鳥の中間にあり、この地域に倭王朝が侵攻したとすれば、北からか南からかどちらであったであ

ろうか。北から侵攻した系統とか侵攻した系統があったのではないか。

北からの侵攻としては、継体天皇紀の経過はその出発点とみられる。

桜井市の天皇陵 崇峻 32(円丘) 舒明 34(上円下方)



図 19.5 桜井市の天皇陵

この2陵は孤立している。崇神・景行と関係付けられるか。

(大)宇陀と桜井を結ぶ道としては 166 号線(右上の斜めに走ってる赤

線)が考えられる。舒明天皇陵は桜井市忍坂にある。

Wikipedia「鏡王女」では

鏡王女は、飛鳥時代の歌人。藤原鎌足の正妻。万葉集では鏡王女、日本書紀では鏡姫王と記されている。興福寺縁起・延喜式では鏡女王。興福寺縁起では藤原不比等の生母(後世の創作とする説もある)。また後述するが鏡王女と鏡姫王を別人とする説もある。

桜井市観光協会ホーム・ページ「大伴皇女墓(桜井市 忍阪)」では

大伴皇女は欽明天皇と堅塩媛(蘇我稻目の娘)の皇女で古事記には大伴王と記されています。兄弟には推古天皇、用明天皇がいます。したがって大伴皇女は聖徳太子の叔母さんという事になります。

王寺・香芝の天皇陵 孝霊 7(山形) 顯宗 23(前方後円) 武烈 25(山形)

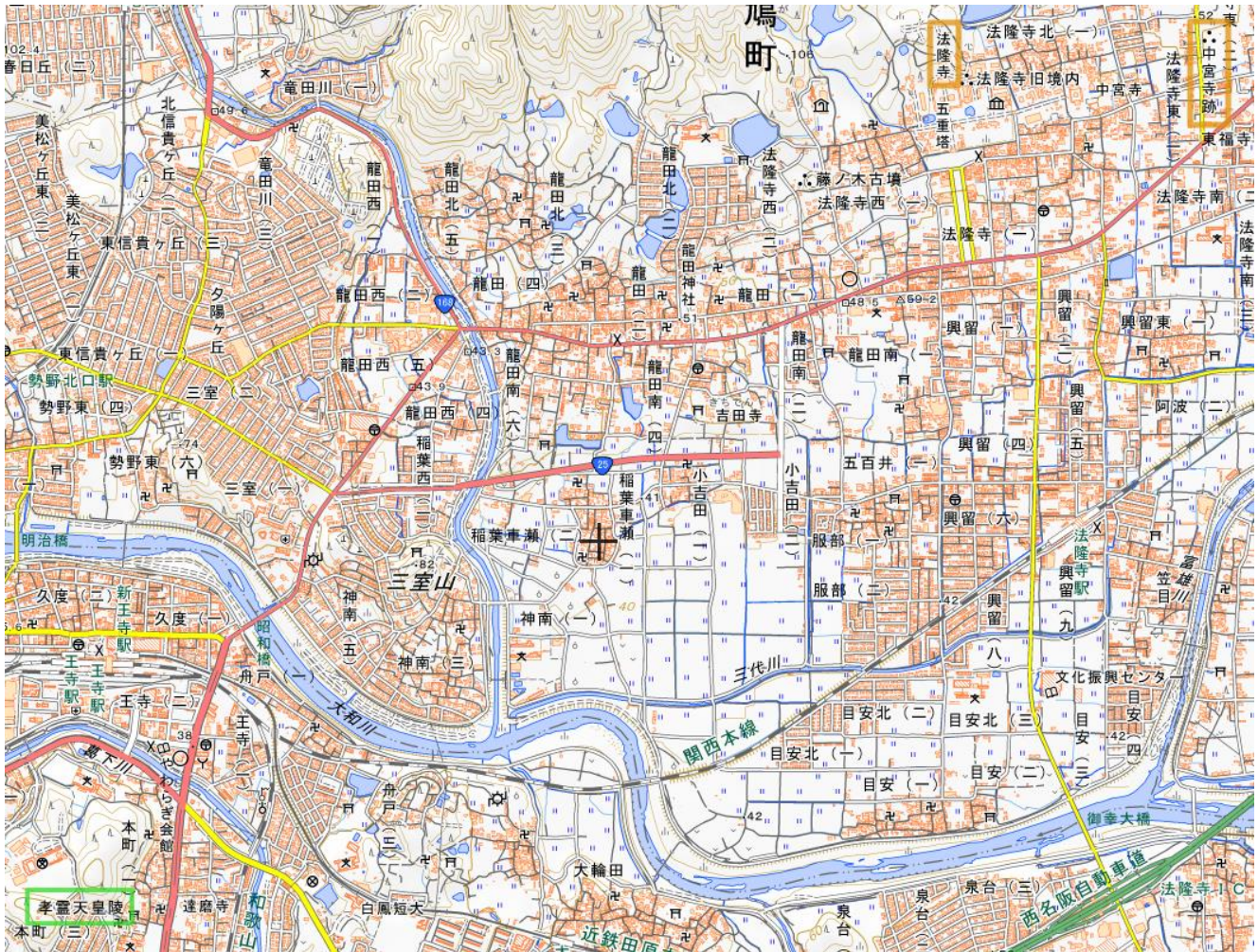


図 19.6 王寺の天皇陵

王寺町の東隣は斑鳩町で南隣は香芝市であり、北は三郷町と平群町となる。香芝市の南は當麻寺のある葛城市・御所市である。三郷町には龍田大社がある。神武天皇紀の龍田攻めの舞台はここであろう。

近鉄大阪線は大阪教育大学駅前駅を過ぎるとすぐにトンネルに入り抜けると香芝市である。トンネル辺りから大和八木駅までの距離は大阪市

外への距離と同じ程度である。

奈良湖と河内湖の存在を考えれば、この平群市から御所市に至る地域は、古代では、豊かな地域であったのではないか。それ故、海兵隊的軍勢では攻略できず、本格的な内陸部の攻略は、吉備からの陸上部隊の到着までは出来なかったと考える。これが継体天皇紀に書かれているのではないかと想っている。この間に南海道ルート of 部隊の到着もあったとも想っている。

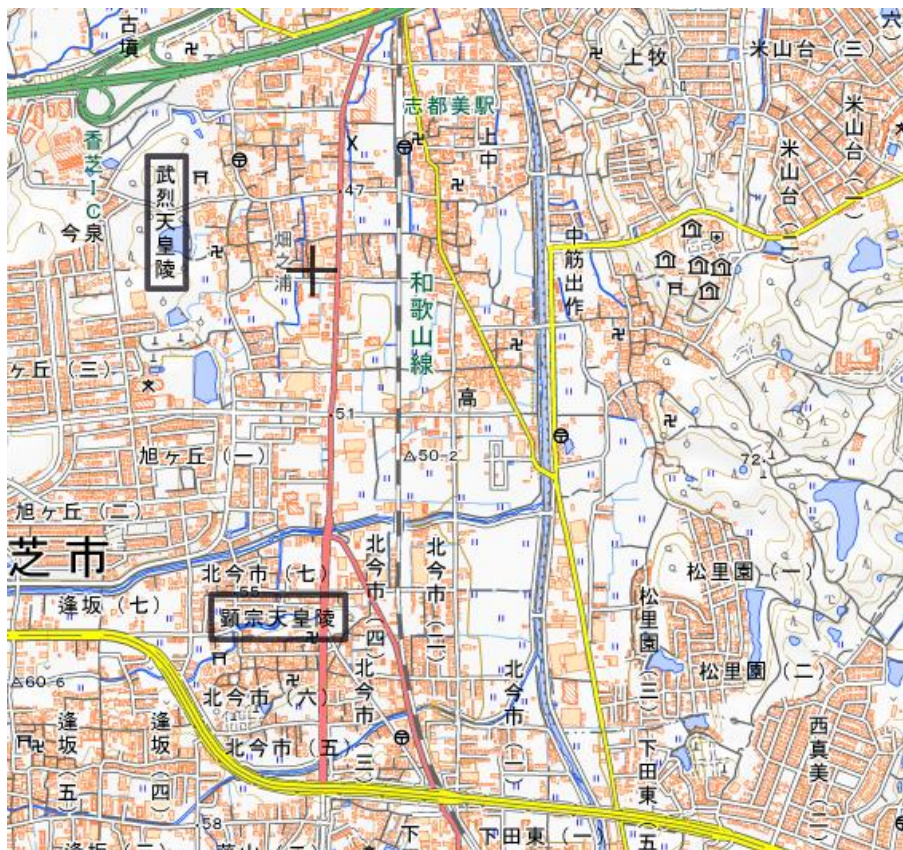


図 19.7 香芝の天皇陵

御所市の天皇陵 孝昭 5(山形) 孝安 6(円丘)



図 19.8 御所市の天皇陵

御所市に天皇陵があるということは意識になかった。この図で、中央下に国見山がある。

紀ノ川流域からの進入路としてはこの辺りが妥当ではないかと想っている。

橿原周辺の天皇陵 神武 1(円丘) 綏靖 2(円丘) 安寧 3(山形)

威徳 4(山形) 孝元 8(前方後円) 宣下 28(前方後円)

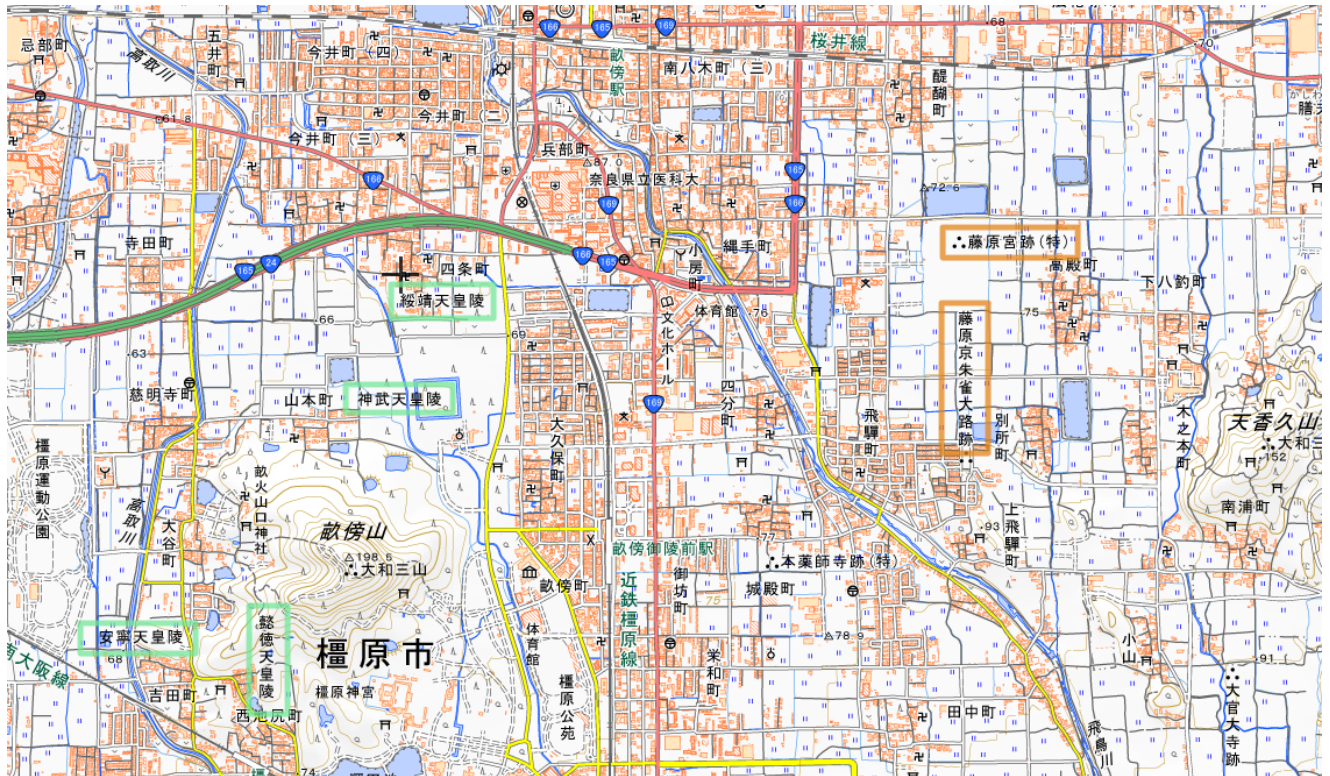


図 19.9 橿原市の天皇陵

緑字の天皇のうち半分となる初代から4代と8代の5人の陵がある。

橿原周辺の天皇陵と藤原京の距離は奈良市の天皇陵と平城京と似ている。藤原京に居る倭王朝の人たちの祖先を祀るものとして設定されたと考える。

明日香の天皇陵 (宣下 28(前方後円) 欽明 29(前方後円)

斉明 35, 37(円丘) 天武 40(円丘) 持統 41(円丘)

文武 42(山形)



図 19.10 明日香の天皇陵

赤紫字の天皇のみである。上図からは斉明天皇陵を明日香に含めるかは問題のように見えるが、所在が高取町であることから明日香でよいと思う。天智天皇の陵が山科にあることが連想される。

百舌鳥古墳群の天皇陵 仁徳 16(前方後円) 履中 17(前方後円)

反正 18(前方後円)



図 19.11 百舌鳥古墳群の天皇陵

3 人とも前方後円墳である。また、東には多数の前方後円墳が見られ

る。堺旧市街に近く、少し北側にある大和川は江戸時代に付け替えられたもので、それ以前は河内湖にそそいでいた。この間は、大和川はなく、現在支流となっている川があったはずである。

さらに北は大阪市住吉区であり、住吉大社がある。距離的にも住吉大社から百舌鳥古墳群一帯を一つの勢力圏と考えられ、難波はこの辺りまで含んだちめいではなかったかと想っている。難波王朝と呼びたいが、もう少し検討が必要である。

古市古墳群の天皇陵 仲哀 14(前方後円) 応神 15(前方後円)

允恭 19(前方後円) 雄略 21(円丘) 清寧 22(前方後円)

仁賢 24(前方後円) 安閑 27(前方後円) (日本武尊)

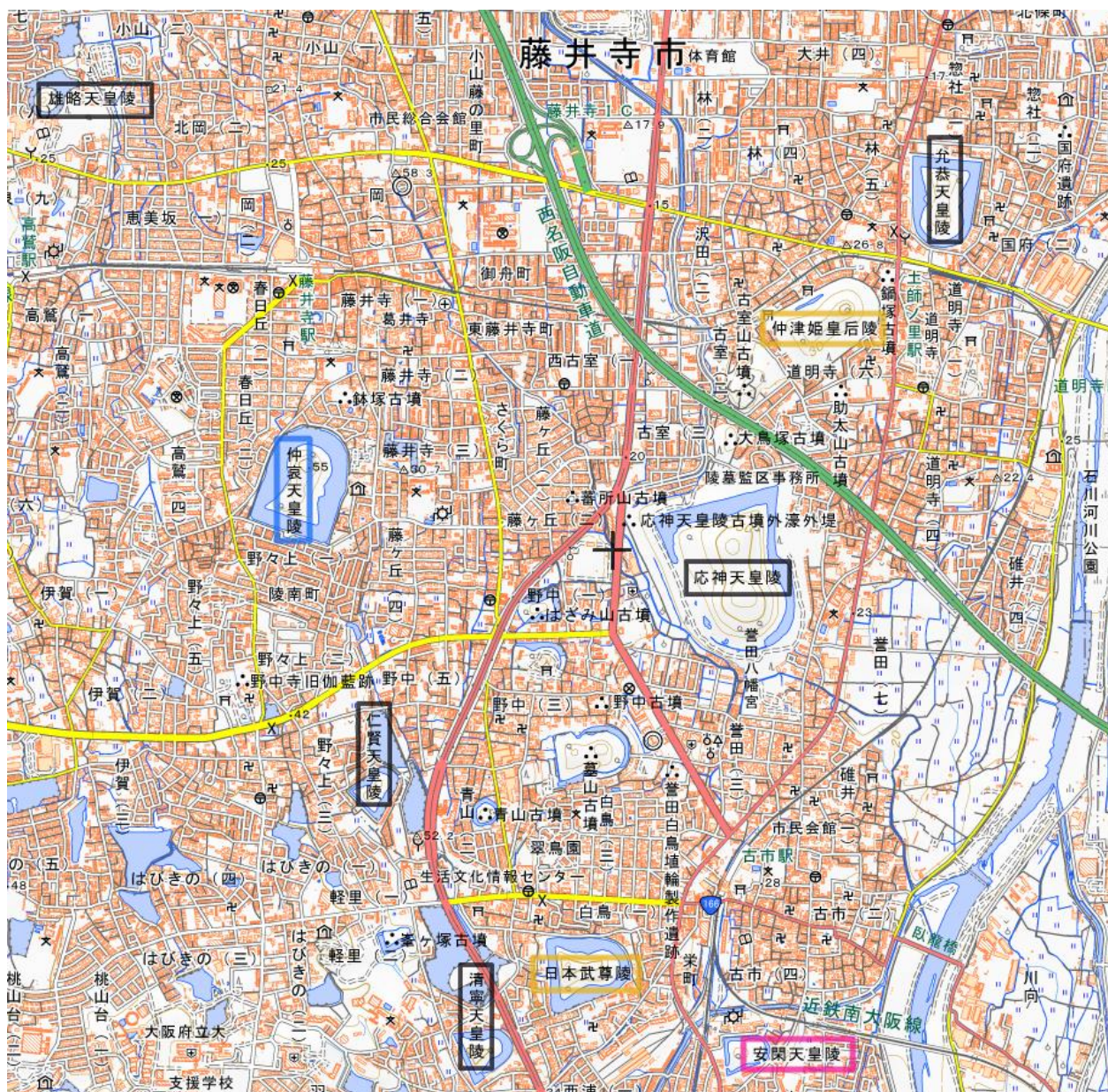


図 19. 12 古市古墳群の天皇陵

本節の初めに述べたように、黒字の 12 人のうち、ここに 5 人、上の百

舌鳥古墳群に 3 人の天皇の陵があり、残りは、香芝に武烈・顕宗の 2 人、奈良と茨木にそれぞれ安康・継体の 1 人ずつである。陵形は雄略・安康・武烈を除き前方後円墳である。

磯長谷古墳群の天皇陵 敏達 30(前方後円) 用明 31(方丘) 推古 33(方丘)
孝徳 36(円丘) (聖徳)



図 19. 13 磯長谷古墳群の天皇陵

全てが赤紫字の天皇である。用明・推古・孝徳と明日香の斉明は和風諡号に豊が含まれている。豊国と関係づけられるだろうか。今まで述べたことから思い付く1つのストーリーを述べてみよう。

倭王朝の九州での最終拠点は豊国であった。従って、東征中にも、こ

こには拠点を守り、周防灘や玄界灘沿岸に睨みを利かすだけの留守部隊が残されていたはずである。山陽路ルート・南海道ルート・中国自動車道ルートの 3 部隊が順次近畿に定着したあと、内陸部の磯長谷に落ち着き、後続の部隊の到着などで力を溜て明日香に浸出したのではないか。

茨木市の天皇陵 継体 26(前方後円)

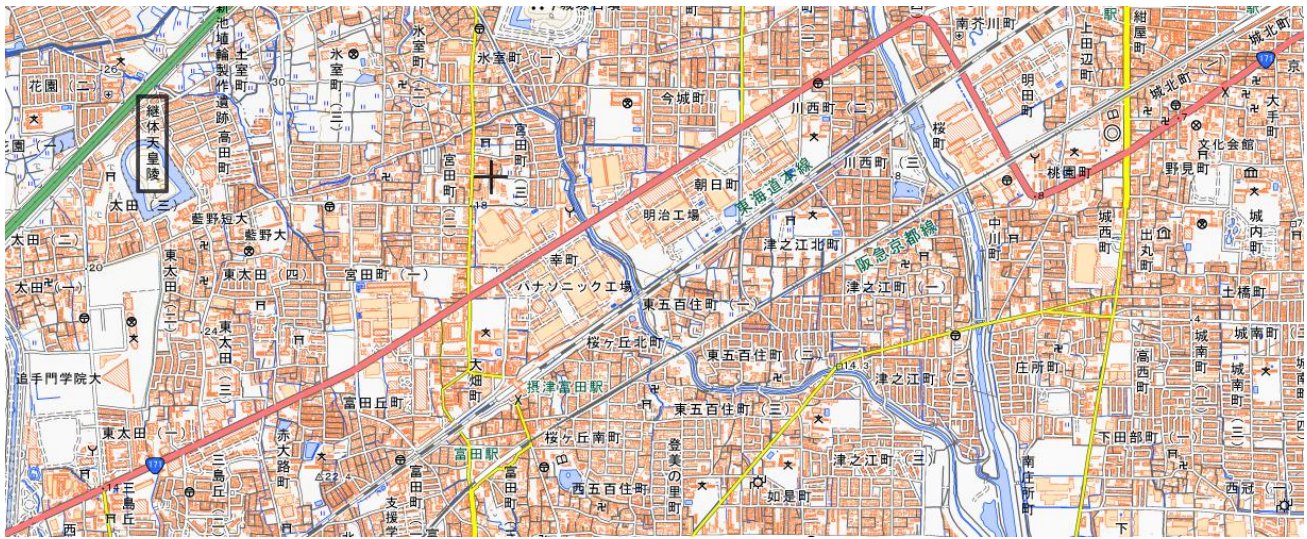


図 19.14 茨木市の天皇陵

三島古墳群に属している唯一の天皇陵である。Wikipedia「三島古墳群」では、古市古墳群や百舌鳥古墳群と並ぶ規模とされている。また、阿武山古墳は藤原鎌足の墓とされている。と書かれている。

後世の西国街道が淀川沿岸に到達する地点であり、吉備からの陸上部隊が拠点とするにふさわしいと思われる。

これからは、継体天皇の在位は遅いことになる。5 世の孫を皇位に就けるのは不自然さを覚える。何世代かを挟むことにより時代を下げたのではないかということが考えられる。Wikipedia「皇室の系図一覧」では応神天皇と同じような節目的な状況が感じられる。

また、淀川水系辺りに摂津王朝が考えられないか。西国街道(ほぼ国道

171 号線)に沿って京都府に入った辺りは大山崎町で天王山があり、(鴨川)桂川・宇治川・木津川の合流地帯になる。それぞれの川を遡る経路が考えられるが、まずは、淀川左岸、枚方、京田辺、木津であろうか。

山科・大津の天皇陵 天智 38(上円下方) 弘文 39(円丘)

方向的には、近江朝は摂津王朝の延長とも考えられる。両天皇紀検討の後に考察することにする。

ここで、作業仮説 19.1 と関連して、“陵が近い天皇は 1 つの皇統に属するのではないか”ということを想いつく。天皇陵としては孤立している継体天皇陵をどう考えるかなど幾つかの問題が派生してくるが、今後の検討課題としておく。

あとがき

19 章のタイトルは“文武天皇までの陵と宮”としたが、「宮内庁＞天皇陵」に書かれている陵の位置を基に殆ど陵の位置からの考察に留まっている。ここまでで考察した天皇紀は継体天皇までであるが、比較の為、文武天皇までも対象とした。実際には、奈良湖の湖水面の標高の考察を行った後、天皇陵の配置に関する議論に入った。各天皇あるいは複数の天皇の陵に宮を書き込んだ地図を作製したら面白いと思ったが、宮の位置をどう特定するかが解決できず、実現していない。

この後、継体天皇紀までについて、Part X とし、皇后とその皇子皇女・地名(できれば宮)・豪族の祖先などの図表を作成し、これから思いつくことを挙げ、関連する事項を調べて予定である。さらに、Part XI として、安閑天皇以後平城京の時代まで、Part XII として、三国史記の記事と、殆ど手を付けていない正史の朝鮮三国の記事を考えている。

12 月の下旬から約 1 か月間、ノートパソコンのマウスが使えない状態が続き、語句の簡単な修正程度しか出来ない状態が続いた。この間に、本稿について想ったことを述べていく。

本稿の作成過程で、彷徨い迷っている、あるいは、病が膏盲に入りかかっているような感じが増してきた。この大きな理由としては、正史には倭の五王が書かれているが、推古天皇紀の裴世清の記事までは、日本

書紀の記事と対応できる記事が無いことである。また、日本書紀以上に理解が捗っていない三国史記であるが、日本書紀の記事と対応する記事は意外と少なく、まして、倭王の王統に関する記事は殆ど見た記憶がない。

これ以上に筆者の知識は記紀を読むにも不足であり、関連事項を調べることは必要である。また、引用文を簡潔にするには、引用する部分の確定とその内容の理解も必要であるので、現状では難しい。

したがって“正史を彷徨う”はこの形式で続けていくしかないが、これと並行して、Part IX までを単独の章に変更することも行っていきたい。序文とあとがきの変更と図表番号の書き換えが最低限必要なことであるが、これだけでは効率が悪いので、節の再編などの内容の変更も行いたいと考えていて、未定ではあるが別タイトルにする方向で考えている。